
とある都市の緊急警告(バイオハザード)

セラフィム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バイオハザード
とある都市の緊急警告

【Nコード】

N8745S

【作者名】

セラフイム

【あらすじ】

異常な静けさが漂う学園都市。嵐の前の静けさとも言つべき静寂の中、事件は発生する。恐怖のウイルスが漏洩した学園都市で、第一位が目にした恐怖の惨状とは。

プロローグ（前書き）

とある魔術の禁書目録とバイオハザードのコラボ。交わるはずのない二つの科学が交わるとき、物語は始まる。

ブローグ

ブローグ

その日の学園都市は、静かだった。

いつもなら多くの車が行き交う片道4車線の道路には、車はおろか、歩行者の姿すらない。

今日は日曜日。

アミューズメント施設が多く並ぶこの第六学区は、いつもなら多くの人で賑わっている。

日曜日ともなれば、なおさらだ。

それだけに、この状況は不可解であると同時に、かなり不気味だった。

そんな静寂を破って、杖をつく音が聞こえてくる。

「…これはただごとじゃねエな。朝から人を一人も見かけてねエ」
首のチョーカーが特徴的な、学園都市最強の能力者は忌々しげに呟いた。

何かがおかしい。

何かが、いつもの学園都市と違う。

人がいないというのは当然おかしいのだが、それ以上の違和感を、彼は感じ取っていた。

「なんなんだ、この感覚はア……」

一方通行すら恐怖するほどの”何か”が、この学園都市で発生しようとしている。

そんな気がして仕方ないのだ。

その予想は、見事に的中してしまうことになる。

[illegible]

唐突に、狭い路地の方から叫び声が聞こえた。

「ッ！！」

一方通行は瞬時に電極のスイッチを入れ、悲鳴が聞こえた方向へ、弾丸のように飛んだ。

またスキルアウトのクズどもがバカやってるのか。

そんな風に考えていた一方通行は、目の前の惨状に驚愕を露わにした。

「なんだ……これは……」

そこには、人の形をした”何か”がいた。

プロローグ（後書き）

とりあえず、プロローグです。どことなく不気味な空気の漂う導入にしてみました。

感想などありましたら、どしどしお願いします。

第一章（前書き）

学園都市で何が起きているのか。上層部により情報が規制される中、第一位は動きだす。全ては、ここから始まった。

第一章

遡ること三時間前。

一方通行とアホ毛少女は二人で食卓を囲んでいた。

某警備員な体育教師と、実質ニートな元研究者は朝から出かけているらしい。

「仮面ライダーオーズって、あんまり面白くないかも。って、ミサカはミサカは愚痴をこぼしてみたり」

「なら見なきゃいいじゃねエか」

「日曜の朝は仮面ライダーを見るのがミサカのジャスティスなの！
って、ミサカはミサカは熱く宣言してみる！」

「そオですか」

一方通行は興味なさげにテレビを見つめる。

すると、テレビの画面が急にニュースに切り替わった。

「ああー！せつかくの仮面ライダータイムがー！って、ミサカはみさk」

「うるせエ！少し静かにしろオ！」

珍しく大声を出した一方通行に、打ち止めは素直に従うことにした。

ニュースキャスターは、淡々と話し始めた。

『番組の途中ですが、緊急のニュースです』

『先ほど、第十学区の生物科学研究所で爆発事故が発生しました』

生物科学研究所。

一方通行はこの名前に聞き覚えがあった。

表向きはバイオテクノロジーや生物の歴史について研究している機関だが、実際は生物兵器の開発を中心に行っている危険な場所だ。

そんな場所で爆発事故が起こったとなれば、ただでは済まないだろう。

『この爆発により、研究所から微量の』

そこでニュースキャスターの声が途切れた。

画面には「しばらくお待ちください」と出ている。

「情報統制……」

一方通行は歯ぎしりした。

こんな状況でも、学園都市上層部は人命より自分達の立場を優先するのだろうか。

「とにかく、他の奴らに危険を知らせなきゃなア」

一方通行は動きだした。

少しでも被害を食い止めるために。

第一章（後書き）

何が起こっているのか、断片的に明かされる第一章です。
一方通行がとった行動とは。第二章に続きます。
感想お待ちしております。

第二章（前書き）

人ではなくなってしまった”何か”と交戦する第一位。
だが、戦っているのは彼だけではなかった。

第二章

（Ｔ・ウィルス…生物の肉体を異常発達させて、暴走状態、いわゆるゾンビにしちまう代物が流出してるとはなア）

目の前の怪物を見据えて、一方通行は考える。

その怪物に噛まれた女性も、もうアウトだろう。

「被害を最小限に抑えるためには、仕方ねエ…」

懷から黒光りする拳銃を取り出すと、真っ直ぐゾンビの頭を狙った。

パンパン！

二発の銃声が響き渡り、ゾンビと、それに噛まれた女性は倒れた。

完全に死んでいる。

一方通行は遺体を調べようとしたが、そんな暇はなかった。

銃声につられるかのように、無数のゾンビが一方通行を取り囲んでいたのだ。

「チッ、気持ち悪いな」

舌打ちすると、一方通行は一気に50mほど跳躍した。

ロケットよりも勢いよく飛び上がると、そのまま高層ビルの屋上に

着地した。

そこから様子を見て行動しようという考えだったが、そこには先客がいた。

「なんだ、生きてたのか」

ホスト風の顔立ちの男は、ポケットに手をつ突っ込んだまま振り向いた。

「よオ、メルヘン帝督じゃねエか」

「俺の名字はメルヘンじゃねえよ!？」

まだまともな人間がいたことに、内心安堵する一方通行。

「…いや、まともじゃねエな」

「声に出てんぞクソ野郎!!」

そんな楽しい言い合いを邪魔するかのように、屋上の扉が吹き飛ばされた。

「来やがったかア」

白髪の少年と茶髪の少年の視線が交差する。

その一瞬で、意思の疎通はできたようだ。

一方の少年は再び電極のスイッチを入れ、もう一方の少年は神々し

く光る白い翼を展開する。

「掃除」の時間だア」

第二章（後書き）

メルヘンな第二章でした。

ていとくんは相変わらずていとくんですね。

行間 一（前書き）

二人の会話。彼の”策”とは一体。

行間 一

「T・ウィルスの流出か。厄介だな」

「どうするつもりなんだい？ 言つとくけど、僕の病院にゾンビを運んでこられても、対処できないからね？」

男は若干の焦りを見せているが、相手はいたって冷静だ。

「案ずるな。策は用意してある」

「どんな策だい？」

訝しげに質問する男に対して、相手は淡々と答えた。

「—————」

「…本気で言ってるのかい？」

「本気かどうかは、君が一番よく知っているだろう？」

男の額に汗が流れる。

相手は本気だ。

「そんなこと、させると思っているのかい」

「君がさせるかさせないかは関係ない。私が、するかしないかだ」

聞く耳持たず。

恐らく、どう説得しても相手はこの計画を実行するだろう。

「24時間後に行く。君は、逃げるなりなんなりするといい」

そして電話が切れた。

それはまるで、命綱がプツン、と切れるかのように、あっけなく切れた。

男は何回もかけ直したが、一度切られた命綱は、再びつながることはなかった。

男はそつと受話器を置き、窓の外を眺めた。

その顔には、怒りも、憎しみも、嫌悪感もなかった。

そこにあるのは、悲しみ。

ただただ深い、悲しみだけだった。

「あの日の約束は、嘘だったのかい……」

悲しげに呟かれた言葉は、誰にも届くことなく、灰色の空へと消えていった。

行間 一（後書き）

何やら不穏な会話でした。策とは一体なんなのか、謎を残したまま、物語は第三章へ。

第三章（前書き）

第一位と第二位の力をもつてしても、一筋縄ではいかなかった。事態は予想以上に切迫していた。

第三章

「なるほど、ゾンビになっても能力は使えるのかア」

「ああ。しかも、肉体増強に伴って、能力のレベルもかなり上がるらしい」

一方通行と垣根帝督は、苦戦とまではいかないが、それなりに手こずっていた。

ゾンビたちが強力な能力を使えるということが、一つの原因と言える。

あるゾンビは炎を放ち、またあるゾンビは電撃を撒き散らしてくる。

いくら第一位と第二位と言えど、こんなゾンビが無数にいたらさすがに手こずる。

頭部を完全に破壊しないと死なないとなれば、なおさらだ。

さらに、一方通行の能力使用限界も近付いている。

これ以上は限界だった。

「チッ、一旦退くぞ」

「それが得策みてえだな」

そう言うが早いか、一方通行は地面を思い切り蹴り、垣根は翼をは

ためかせ、飛翔した。

「ところで、どこへ行くんだ？」

「とりあえず俺が居候してる家だア！食料もあるし、情報収集もできる！」

その刹那、二人の姿が消えた。

ゾンビに視認すらできないほどの速度で二人は空を切る。

一方通行の能力使用時間は残り1分22秒。

一刻の猶予もないのは火を見るより明らかだった。

彼女は不安で仕方がなかった。

彼女というのは、警備員で緑色のジャージと打ち止めにしばしば敵視される胸が特徴な体育教師、黄泉川愛穂である。

何故不安なのか。

それは簡単なことで、一方通行と連絡が取れないからだ。

朝から街にはゾンビが徘徊しているし、学園都市第一位の能力者が簡単にやられることはないだろうが、それでも心配だ。

打ち止めも、彼の無事を祈りながらずっと外を眺めている。

張りつめた空気が漂う黄泉川家に、電話の着信音が鳴り響く。

『着信 from 一方通行』

紛れもなく、一方通行からの電話だ。

すぐさま受話器を取ると、黄泉川は大声で叫んだ。

「一方通行！？おまえ、無事…」

その声は、一方通行の大声で掻き消された。

「生き残ってたクソ野郎を連れていく！窓を開けておけエ！！」

一方通行の、珍しく焦った声を聞いて、黄泉川はおとなしく従った。

窓を開放すると、ゾンビ特有の腐敗臭が漂ってくる。

しかし、そんなものを気にする暇もなく、黄泉川家に突風が吹き荒れた。

台風のような突風はすぐに収まり、そこには二人の人間が立っていた。

片方は、帰りを待ちわびていた白髪細身の少年。

もう片方は、電話越しに聞いた『生き残っていたクソ野郎』というやつだろう。

茶髪で、ホスト風の整った顔立ちをした長身の少年だ。

「お、お邪魔します」

茶髪の少年は気まずそうに頭を下げる。

つられて、黄泉川も頭を下げてしまう。

「い、いらっしやい」

とてもぎこちない。

そして気まずい。

例えるなら、友達の友達に無理やり会わされたような状況だ。

「ま、まあ、とりあえず無事でよかったじゃん？」

「ああ。ギリギリなア」

電極の充電の準備をしながら、一方通行は答える。

あと数秒遅ければ、電極のバッテリーは完全に切れていた。

そのことは、素直に喜ぶべきだろう。

「さアて、とりあえず情報収集しねエとなア。学園都市が今、どんな状況に置かれているのか」

垣根と黄泉川は、黙って賛同した。

この状況を生き抜くためには、正確な情報がないことには始まらない。

長い戦いになりそうだ、3人はそれぞれ心の中で思った。

実際には、あと22時間弱である計画が発動されることなど、彼らには知る由もない。

「とりあえず、なんか食わせてくれエ」

「そういえば、昼御飯がまだだったじゃんね。垣根君だけ？君も食べるというじゃんよ」

「あ、こゝごちそうになります」

そう言って椅子に座った直後、垣根を除く二人は異変を感じた。

どつと冷や汗がわいてくるような、とんでもない異変を。

その異変を、どちらともなく言葉にする。

「…打ち止めは？」

第三章（後書き）

打ち止めに死亡フラグか！？
第四章へ続く！

第四章（前書き）

ウイルスの前には、全てが無力なのか。
そんな状況で下した、彼女の決断とは。

第四章

彼は取り囲まれていた。

無数の、人の形をした化け物に。

「卵が切れてたから買いに行こうと思ったら、なんでこんなことになってるんでせうか？」

不幸なツンツン頭の少年は、完全に路地裏に追い込まれていた。

乱射してくる能力を右手で打ち消している間はよかったものの、単純な腕力勝負では幻想殺しは役に立たない。

つまり、今の上条に勝機はもはや残されていなかった。

「ここ、までか…今まで何度も命がけで戦ってきたのに、呆気ねえよな…」

明後日の方向を見ながら疲れたような声で呟く上条に、ゾンビたちは容赦なく噛みついた。

幻想殺しで、ウィルスを無力化できるんじゃないか、そんな幻想はあっさりぶち殺された。

身体がどんどん制御できなくなっていく。

まるで、自分の身体が何者かに乗っ取られるかのようなだった。

その時、突如電撃が辺りに降り注いだ。

ゾンビたちは次々に倒れ、痙攣している。

そして、上空からは颯爽と少女が舞い降りた。

ショートカットの茶髪に、スカートの下にはいた短パンがトレードマークの学園都市第三位、御坂美琴だ。

「ふう、なんとか間に合ったみたいね…って、アンタ、その噛み傷、まさか…」

少女の表情が、安堵から絶望へと180°切り替わる。

「ああ、噛まれちまったんだ。情けねえよな、こんなところで終わっちゃうなんて」

諦めたような表情で、上条は語る。

「そんな…なんで、よりによってアンタが…イヤよ、こんなの絶対にイヤ!!」

気が付くと御坂は涙声になっていた。

大切な人が、倒すべき敵へと変貌していくというのは、ある意味死ぬのを見届けるより辛いかもしれない。

そんな彼女に、上条はただただ微笑みかける。

「泣くなよ、御坂…」

それは、この状況では酷な注文かもしれない。

それでも、彼は言葉を続ける。

浸食されていく意識の中で、それでも”上条当麻自身”の想いを、
必死に紡ぐ。

「笑ってくれよ。おまえの、そんな辛そうな顔を見ながら逝くな
んてゴメンだ…」

「俺、御坂のことが好きだからさ…」

「えっ」

不思議そうな顔をする御坂を見て、上条は優しく笑いかける。

「だからさ、おまえの超電磁砲で終わりにしてくれよ。御坂に殺さ
れるなら、俺は本望だ」

それは、着実に消えていく”上条当麻”の、最期の願いだった。

それが分かっているにも、御坂には打つことができない。

「そんなこと、できるわけじゃないじゃない！」

これほど悲痛な叫びを、上条は聞いたことがなかった。

無理もない。

逆の立場だったら、きっと上条には殺せないだろう。

理不尽な頼みだ、上条は心の中で思った。

でも、そうしないと、その先に待っているのはただただ残酷な悲劇だけだ。

それが分かっているからこそ、上条は最後の力を振り絞って懇願する。

「お願いだ、御坂……」

その言葉が、”上条当麻”の最期だった。

身体から”上条当麻”という自我が完全に消え去り、完全にゾンビと化していた。

御坂は、あふれる涙をこらえながら、コインを構えた。

ようやく決心がついた。

自らの手で、上条当麻”だったもの”を葬る。

それが、彼の最期の望みだから。

「私も、アンタのことが好きだから……ずっと……」

御坂の手から、勢いよくコインが放たれた。

雷の如くまばゆい光を撒き散らし、上条だったゾンビは光に包まれ

た。

「さようなら、当麻」

御坂は、満面の笑みを浮かべて言った。

それは、御坂が彼へ見せた唯一の好意の証だった。

光が収まった時、そこには何も残っていなかった。

「あつ……」

ある”物”を除いて。

それは、彼の置き土産だったのだろうか。

それを御坂は、震える手で拾う。

自然と笑みが零れていた。

彼女はそれを自分の携帯に付ける。

『ずっと一緒』

そんな意味を、こめていたのかもしれない。

第四章（後書き）

上条さん…

なんというか、呆気ないですね…

行間 二（前書き）

刻一刻と近づくタイムリミット。
彼の思惑は、なんなのか。

行間 二

「どういっつもりだ？」

彼は静かに問う。

目の前に転がされている、拘束された男を見下すように。

「あんたの『プラン』とやらに従うのは飽き飽きしてたんだ」

拘束された男は、睨みつけながら答えた。

対する”彼”は、相変わらず余裕だ。

「危険度の高いＴ・ウィルスを扱う研究所の意図的な爆破とは。いささかやり過ぎじゃないかね？」

「このくらいしねえと、てめえのプランに支障をきたさねえだろうが」

男はプランの全容は知らないが、生半可な方法では妨害できないというくらいは予想できた。

だからこそのような未曾有のテロを発生させ、結果的に学園都市はほぼ壊滅状態になったはずだ。

それなのに、”彼”がなぜこつも余裕なのか、男には理解できなかった。

「T・ウィルスで学園都市にはゾンビが溢れ、幻想殺しを失う結果となった。たしかに手痛い損失だ」

「”飼犬”に手を噛まれる、とはこのことか」

彼はわずかに笑った。

こんな状況で何故笑えるのか、男には皆目見当もつかない。

「不思議そうな顔だな。一つ、教えてやろう」

彼は、事も無げに言い放った。

「私にとっては、この学園都市すら手駒の一つに過ぎない」

男は目を見開いた。

彼のプランは、想像をはるかに超えている。

いや、人間に想像できている時点で、充分甘いかもしれない。

「さて、そろそろ消えてもらおうか、裏切り者のブリーダー君」

次の瞬間、男は絶命していた。

何が起ったのか、彼にしか分からない。

「さて、あと21時間か」

彼は、嬉しそうに呟いた。

行間 二（後書き）

行間はなるべく意味ありげにしようとした結果がこれです。
なにはともあれ、物語はさらに加速します。

第五章（前書き）

次々と倒れゆく人々。
極限状態の中、彼はついに爆発する。

第五章

一方通行はため息をついた。

打ち止めがないことに気付いた黄泉川は、すぐさま垣根の襟首をつかんで搜索に行ってしまったのだ。

「えっ、ちょ、なんで俺が…」

という言葉を残して、彼らは家を後にした。

一方通行はバッテリーの充電が終わるまで外に出るわけにはいかないのだ。

不便だ、一方通行は心の中で毒づいた。

全盛期なら、気にすることなく能力をフル活用できたというのに。

こんな状態になってしまった自分自身の無力感に苛まれながら、彼は再びため息をついた。

彼らが搜索に出てから、30分が経過した。

彼らからは何も連絡はきていない。

そろそろ電極のバッテリーも充電が完了する。

俺も出るか、そんなことを考えた矢先、一方通行の携帯が鳴った。

『着信 from 打ち止め』

「!？」

打ち止めからかかってくるとは、予想外だった。

とにかく、若干焦りながら通話ボタンを押す。

電話のむこうからは、かなり切迫した声が聞こえてきた。

『助けて!! って、ミサカはミサカは声を限りに助けを求めてみた
り!!』

「何があつたア!？」

一方通行も大声で聞き返す。

『ゾンビに襲われて、なんとか廃ビルに逃げ込んだんだけど、見つ
かっちゃって、もう逃げ場がないの!! って、ミサカはミサカは簡潔
に今の状況を説明してみる!!』

「すぐに行く!! 死ぬンじゃねエぞ!!」

その言葉と同時に、電極の充電が完了した。

その電極を取り付け、ためらいなく能力を解放する。

窓から飛び出し、地面に着地した一方通行は、なんの迷いもなく地
面を蹴り飛ばした。

弾丸を越えるほどの勢いで一方通行は加速する。

守るべき人のもとへ、ただ一方通行は飛んだ。

途中にいくつものビルや建物があつたが、一方通行の行方を遮ることなどできない。

数分後、打ち止めが言っていた廃ビルに到着した。

正確には、壁を粉碎してゾンビどもを蹴散らして着地した。

そこに、打ち止めはいた。

噛み傷などの目立つた外傷もなく、無事のような。

強いて言うなら、彼女は放心していた。

まるで、大量の処理を一度に行わせようとした結果、フリーズしてしまったパソコンのようだ。

そのくらい、目の前の光景は、耐えがたい悲劇だったのだろう。

あの一方通行ですら、驚愕のあまり体を動かせないでいるのだから。

「黄泉川……？」

そこには、変わり果てた黄泉川の姿があつた。

位置から考えると、打ち止めをかばって、自分が噛まれてしまったのだろう。

警備員である彼女なら、子供を守るために自分を犠牲にすることくらい容易いはずだ。

ちょうどそこに、垣根が舞い降りた。

ちょうどいい、一方通行は必死に冷静を装って垣根に向き直った。

「打ち止めを家に連れて戻ってくれ。俺が戻るまで、何があっても必ず守り抜け。守りぬけなかったら、てめエを愉快的オブジェにしてやる」

その言葉と状況から、垣根は全てを悟ったようだった。

そして、ただ一言呟いた。

「貸し一ツな」

「ほざいてろ、メルヘン野郎オ」

そして垣根は再び飛び立った。

打ち止めを連れて、遠く遠く飛んでいく。

それを見届けて、一方通行は再びスイッチを入れる。

背中からは漆黒の翼が噴出し、口はニヤリ、と不気味に歪む。

「大掃除だア。せいぜい足掻きやがれエ」

廃ビルが粉々に砕け散るのは、数秒もかからなかった。

第五章（後書き）

黒翼 k t k r

物語は、次第にクライマックスに向かっていきます。

第六章（前書き）

重く張りつめる空気。

悲しみを胸に、彼らは立ち上がる。

第六章

3人はテーブルを囲んで座っていた。

重い空気が漂い、言葉を発する者はいない。

それというのも、いつもはこの家のムードメーカーとも言つべき存在を失ってしまったからだ。

3人とも、極度の無気力感に襲われていた。

もう、何をしても助からないんじゃないか、そんな考えに捕らわれていた。

気付いたら、3人は眠りについていた。

朝からショックの連続だっただけに、極度の疲労に襲われたのだらう。

一時間が経ち、二時間が経ち、三時間が経ち…

3人はもちろん、あと10時間もしないうちにある計画が実行されることは知らない。

ふと、一方通行は目を覚ました。

辺りはすっかり暗くなっている。

とにかく、いつまでも悲しみに沈んでいるわけにはいかない。

情報を集めるため、パソコンを起動させた。

インターネットを開くも、『接続エラー』の文字しか表示されない。

「規制がかけられてやがるか…」

正確な情報を何一つ手に入れられないというのが、どうしようもなくもどかしかった。

一般回線、元グループが使っていた守秘回線、さらには衛星回線すらアクセスができない。

「元、グループ…?」

そこで、一方通行は一つの希望を思い出した。

グループの実質的リーダーだった多重スパイ、土御門元春だ。

彼なら、何か情報をつかんでいるだろう。

祈るように、電話をかけた。

『おかけになった電話番号は、現在使われておりません』

電話のむこうから聞こえるのは、無機質な声だけだった。

希望は、いとも簡単に潰えた。

今度こそ完全に手詰まりだ。

どうしても情報を知りたければ、学園都市の外に出なければ…

「…ン？」

一方通行は気付いた。

何故こんな簡単なことに気付かなかったのだろう、そんな思いとともに。

「この学園都市から、脱出すりゃアいいじゃねエか」

そうすれば、とりあえず安全だし、情報も手に入る。

そうと決まれば、打ち止めの肩を優しくゆすって起こし、垣根の脛を蹴り飛ばして起こした。

「俺の扱い酷くね！？」

何やら喚いている垣根を華麗にスルーし、一方通行は一言宣言する。

「学園都市から脱出すンぞ」

2人とも、拒む理由はなかった。

「でも、こんな状況だし、ゲートは完全に封鎖されてるだろ。どうやって脱出するんだ？」

垣根は一つ質問をした。

一方通行は呆れたように答える。

「てめエの翼は飾りかア？それとも、限界高度はたった5mですつてかア？」

とても単純だった。

飛べばいいだけの話だ。

「他に文句はねエな。ンじゃ、行くぞ」

20時32分、3人は外へ出た。

打ち止めは、一方通行の背中に抱きついている。

親子のようにも見える、微笑ましい光景だ。

しかし、外に出た彼らは予想だにしない光景を目にすることになる。

「どうなってんだ、これはア……」

第六章（後書き）

いよいよ学園都市からの脱出を実行に移す彼ら。
一体何を見たのでしょうか。

行間 三（前書き）

ついに発動される計画。

もはや、引き返すことはできない。

行間 三

「作戦開始だ」

彼は、画面に向かって言い放った。

『し、しかし、作戦開始まではあと7時間以上も…』

部下の動揺した声を、彼はなんの感情もこもっていない言葉で掻き消す。

「聞こえなかったのか？ 『作戦開始』 と言ったのだが」

『っ！』

声だけでも、部下の男が身震いしたのが分かる。

従わなければ殺される、彼の言葉は、そう感じさせるものだった。

『…了解』

その言葉を聞き、彼は口元を緩める。

笑っているように見える。

モニターには、とある3人の姿が映っていた。

「彼らなら簡単に脱出してしまっからな。計画変更はやむをえない」

彼はとても嬉しそうだ。

いつでも完璧な計画を完璧なスケジュールで行う彼にとって、スケジュール通りに行かないという現象がとても新鮮なのかもしれない。

「まあ、彼らがどのような作戦に出ようとも…」

彼はより一層口を歪ませる。

「逃がしは、しない」

20時27分、彼の計画はスタートした。

行間 三（後書き）

何やら計画が始まるようです。

”彼”の思惑と、3人の計画がついに交差する。

第七章（前書き）

目の前に広がる絶望。

第一位は、何を決意するのか。

第七章

「どうなってんだ、これはア…」

3人が外へ出ると、目を疑うような光景が広がっていた。

夜のはずなのに、異常に明るい。

それも、太陽や月による自然な明るさではなく、まるでマグマのよう
に赤く光っている。

高層ビルに飛び乗って遠くを確認すると、隣の学区が完全にマグマ
と化していた。

一方通行は身震いして、空を見上げる。

空は、無数の黒い塊で埋め尽くされていた。

一方通行には見覚えがある。

かつて、アビニオンを制圧する時に使用された超音速ステルス爆撃
機だ。

あの爆撃機には、アイスブレード地殻破断と呼ばれる兵器が搭載されている。

たった3キロの砂鉄でユーラシア大陸を切断してしまうほどの恐ろ
しい兵器だ。

そんな兵器が、容赦なく学園都市に降り注いでいる。

「上層部のクソ野郎ども、生存者のことなンぞどオでもいいってかア……」

一方通行は天に向かって叫んだ。

彼にしては珍しく、純粋な怒りだけが込められた言葉だった。

「さて、どうする？あいつら、ケーキをカットするような要領で学園都市を切り裂いてやがるぜ」

「人間のすることじゃない……って、ミサカはミサカは弱々しく呟いてみたり……」

打ち止めはおろか、学園都市第二位までもが絶望的な声をあげる。

3人がいる学区が、他の学区から次々に切り離されていく。

効率的な方法だ、一方通行は思った。

ウィルスの拡大を防ぐために、学園都市を学区単位で隔離する。

ある意味、被害を最小限に食い止められるだろう。

「だが……」

一方通行は歯ぎしりする。

たしかにこの作戦は効率的かつ有効だ。

しかし、そこに人道的だなんて言葉は存在しない。

生存者のことなんて少しも考えていない。

そもそもこの作戦自体が、生存者はいないという仮定の上に成立している作戦なのだろう。

上層部やアレイスターにとって、学園都市の住人とは、しょせんその程度の存在だったのだ。

使えなくなったら処分して、また新たに用意すればいい。

まるで家電製品のような扱いだ。

だからこそ…

一方通行は決意する。

必ず、学園都市から脱出する。

必ず、生き残る。

犠牲になった全ての人々のために、そして、上層部を見返すために。

「行くぞ」

一方通行はそつと呟いた。

それは強がりでもやけくそでもない。

この状況を打開しようという強い意志のこもった、単なる宣言。

そして一方通行はゆっくりと振り向く。

そこには、ざっと数千体のゾンビが群がっている。

釣られて振り向いた垣根も、一方通行の言わんとしていることを汲み取ったようだ。

一方通行はもう一言だけ続けた。

「命がけの、反逆だア」

第七章（後書き）

物語はいよいよ大詰めです。
激動の第八章へ、続く！

第八章（前書き）

絶体絶命の状況。

もう、希望はないのだろうか。

第八章

「どオする……」

群がってくるゾンビを蹴散らしながら、一方通行は思考を巡らせる。

彼一人だけなら、地殻破断など難なく反射して脱出できる。

しかし…

彼は垣根と打ち止めの方を見る。

垣根なら大丈夫かもしれないが、打ち止めはマグマの熱だけでやられてしまうだろう。

一方通行に操作できるのは、自分が触れているもののベクトルだけだから、打ち止めを守りきることはできない。

かと言って、空を飛ばうにも超音速ステルス爆撃機が大量に浮かんでいる。

そう簡単に逃がしてもらえないはずがない。

正直、八方ふさがりだった。

方法が見つからないまま、時間は無情に過ぎていく。

気が付けば、彼の能力使用限界まであと5分を切っていた。

ここで決断しなければ、全員死んでしまう。

そして一方通行は一つの考えに行きつく。

彼がバカバカしいと非難していた、自己犠牲という名の考えに。

「垣根エ！今から、俺はあのクソでけエ爆撃機を蹴散らす！その間におまえらは飛んで逃げろ！」

ごく単純な、作戦だった。

しかし、垣根には理解できない。

「おまえはどうすんだよ！？まさか、犠牲になる気か！？」

垣根は青ざめたような表情で叫んでくるが、さらに大声で叫び返す。

「ここで死んだら、上層部の思うつぼだろオが！必ず生きて脱出してやるよー！」

嘘だった。

能力使用時間はあと3分。

爆撃機を蹴散らして、脱出するには時間が足りない。

途中でバッテリーが切れて、そのまま地殻破断の餌食になるのは目に見えていた。

それを知ったら、垣根や打ち止めは死に物狂いで止めようとするだ

ろっ。

だからこそ、本当のことが言えなかった。

「早く行けエ！！」

一方通行は声を限りに叫ぶ。

その言葉を受け、打ち止めを抱えた垣根は大空に舞い上がった。

同じく一方通行も勢いよく飛び上がる。

「必ず、帰ってきてね。って、ミサカはミサカは心からお願いしてみたり」

打ち止めは涙目で必死に訴えてきた。

自分には、その約束は守れない。

それが分かっているだけに、この言葉を返すのは死ぬほど辛かった。

「ああ、必ず帰る。だから、待っていてくれエ」

その言葉を最後に、垣根たちは脱出するために一方通行のもとを離れた。

それを追おうとする爆撃機の上に、彼は降り立った。

邪魔だけは、絶対にさせない。

そんな思いを胸に、一方通行は爆撃機のように破り捨てた。

「さアて、全員道連れだ、クソ野郎どもがアアアアアアアアアア！
！！！！！！！！！！」

2分後、粉々になった全ての爆撃機とともに、彼は落ちていった。

もはや演算能力は残されておらず、ただただ壊れた人形のように、彼は高層ビル5棟分はあるような高さから落ちていく。

普通の人間なら、まず命はないだろう。

能力を失った彼なら、なおさら。

そんなことも、もはや今の彼には理解できない。

ただ、重力という名の運命に従って、下へ、下へ――

垣根と打ち止めは、ビルの上に立っていた。

学園都市から2 kmほど離れた、高層ビルの上だ。

そこから学園都市を見つめる。

学園都市は、燃えていた。

科学の最先端を誇る都市は、無残にも燃え尽きようとしていた。

しかし、彼らはそんなことに興味はない。

ある人物が帰ってくることを祈って、ずっと見つめ続けている。

一時間。

二時間。

三時間。

彼の姿が見えることは、なかった…

第八章（後書き）

第八章でした。

一方通行…

物語は、思いもよらないクライマックスへ。

行間 四（前書き）

完璧を追求した結果。

彼は、絶望を目の当たりにする。

行間 四

「君には完全に騙されたよ。まさか、この私を欺く変装ができる人間がいるとは」

いつもは感情を露わにしない彼にしては、珍しく言葉に憎しみがこもっている。

しかも、相手は既に自らの手で葬っているため、これ以上痛めつけることもできない。

その事実が、彼をさらにイラつかせていた。

「おかげで私の計画は見事に大失敗だ。こんな屈辱は初めてだよ」

彼は忌々しげに死体を踏みつぶすと、声を荒げた。

「学園都市から脱出した人数は？」

部下は慌てたように報告する。

『今のところ、126名の脱出が確認されています！』

彼の目は大きく見開かれた。

ありえない。

感染者数から考えても、そんなに多くの人間が脱出するのは不可能だ。

彼には何が起こっているのか分からなかった。

そんなとき、唐突に着信が入った。

モニターに表示された発信者の名前を見た瞬間、一つの可能性が彼の頭をよぎった。

「そんな……そんなことが……」

彼は恐る恐る、電話に応じる。

相手は名乗ることもせず、ただ一言言った。

「言っただよ？ 思い通りにはさせない、と」

『学園都市の人々はなんとしても守り抜く、この約束は守れなかつたけどね……』

そして電話は切られた。

彼の中に、初めて『絶望』という感情が芽生えた瞬間だった。

「よくもおおおおのおのおのおのおのおのお……！！！！！！」

彼の叫びは、『窓の無いビル』に響き渡った。

行間 四（後書き）

思い通りにいかなかったことへの屈辱。
彼にとっては、耐えがたきものだったのでしょう。

終章（前書き）

全てが終わった世界で、生き残った者は何を見るのか。

終章

垣根と打ち止めは、墓参りに訪れていた。

もちろん、自分たちを救うために犠牲になった、学園都市第一位の墓だ。

あの事件から、ちょうど一ヶ月が経った。

あの事件がたった一日の出来事だというのは、いまだに信じられない。

あの日のことを思い出しながら、2人は手を合わせる。

2人の目からは、自然と涙が零れていた。

2人とも、彼の死をとて悲しんでいるのだ。

特に、打ち止めにとっては受け入れがたいことこの上ないだろう。

そんな時、2人の背後から声がした。

「…死んでもねエ人間の墓の前で、何メソメソ泣いてやがんだ。気持ち悪い」

2人にとっては、幻聴だとは思えなかった。

いよいよ精神を病んできたか、そんなことを考えながら沈黙し続ける2人に、“彼”はだんだん苛立つ。

「オーイ、無視ですか？ そんなに2人とも、血流操作で綺麗な血風船になりてエのかア？」

妙にはつきりした幻聴だ。

恐る恐る、2人は振り向いた。

そこには、待ちわびた”彼”の姿があった。

「あ、一方通行！？お、おまえ、どうして！？」

垣根は完全に冷静さを失っていた。

一方通行は、めんどくさそうに口を開く。

「ああ、それは…」

説明しようとした彼の言葉は、小さな体に遮られた。

打ち止めはなんのためらいもなく一方通行の胸に飛び込んでいた。

「本当に…本当によかった…って、ミサカは、ミサカ、は…っ！」

号泣しているせいで、その後の言葉は聞きとれなかった。

それでも、彼はしっかりと彼女の小さな体を抱きしめる。

「心配かけて、悪かった。約束通り、ちゃんと帰って来たからよオ…」

気付けば、一方通行の目からも涙が零れていた。

大切な人が、自分の帰りを待っていてくれる。

それは何気ないことかもしれないが、こんなにも温かく、素敵なものだとは知らなかった。

その喜びを噛みしめながら、より一層彼女の体を強く抱きしめる。

二度と離れ離れにならないように。

彼は、そっと呟いた。

「…ただいまア」

彼女は満面の笑みで答える。

「…おかえり」

終章（後書き）

何故生きてたし、と思ったそこの方、エピソードへどうぞ。

エピソード（前書き）

明かされる、数々の謎。

彼らは、大事なものを再び取り戻した。

エピソード

「で、説明は？」

蚊帳の外つばい扱いに耐えられなくなった垣根は、はっきりと質問した。

「説明イ？なんの？」

一方通行はポカンとしている。

「だから！なんでおまえは生きてるんだ！？」

「あア、話せば長くなるなア」

そして、彼は語り始めた。

あの日の真実を。

――――

一方通行は目を覚ました。

何故自分が生きているのか、全く分からない。

あの高さから落下したら、死は免れないはずだ。

そこまで考えたところで、演算機能が戻っていることに気付く。

それと同時に、何者かの腕の中にも気付く。

顔を動かすと、刺青の入った顔が視界に入った。

「…うわァ」

「第一声がそれかよ!？」

露骨に嫌そうな反応をした一方通行に対して、男は憤慨する。

「寝起きに木原くんの顔とか、ないわァ」

「それが命の恩人に対する言葉か!？」

「命の恩人…?」

不思議そうに聞き返す一方通行に、木原はまくしたてるように説明する。

「そうだよ!てめえが空から降ってきたから、受け止めてやったんだよ!ありがたく思いやがれ!」

「木原くんに助けられるとか、屈辱だわァ」

「ホントにム力つくガキだなあ!!」

そんな応酬に割り込むように、カエル顔の男が口を挟んだ。

「どこか、痛いところとかはないかい?」

「あア？冥土返しか。こんなところで何やってんだア？」

冥土返し、と呼ばれた男は、事も無げに答えた。

「そうだねえ。救援活動、とでも言っておこうか？」

「救援？」

冥土返しはポケットから、アンプルに入った薬品を取り出した。

「T・ウィルスの抗体だ。感染してから3時間以内なら、この抗体を打てばゾンビ化は防止できる」

「そんな便利なもんがあるなら、最初から使えば被害は最小限に抑えられたんだねエか？」

「あいにく、先ほど完成したばかりなんだ」

「自作かよオ！？」

相変わらず、腕のよすぎる医者だ、彼はそう思った。

「一応、効果は抜群みたいだよ？上条君も、元にもどったしね？」

その言葉に応えるように、上条当麻が姿を現した。

若干気分が悪そうだ。

「ヒーロー！？」

「久しぶり、一方通行」

「ああ、無理しない方がいいよ？さっき抗体を打ったばかりなんだから」

「ところで」

一方通行は再び木原に向き直る。

「てめエは何やってンだア？アレイスターの部下だろオがよ」

木原は、真剣な顔をして答える。

「どっかのバカのおかげで、俺は死んだってことになってんだ。おかげで、自由に動き回れんだよ」

「どっかのバカ？」

一方通行は不思議そうに問いかける。

木原は、難しい顔をした。

「名前は聞いてねえんだけどよ、形見とか言っつて、こんなナイフをくれたんだよ。『トラウイスカルパンテクウトリの槍』とか言っつてたっけか」

懐から黒曜石のナイフを取り出しながら、木原は言った。

一方通行には、よく見覚えがあった。

（あの野郎オ…）

彼にも、守りたい世界があつたのだろう。

そして、その世界を守ってくれるであろう人間に全てを託した。

なんとも彼らしいやり方だ。

「さて、あいつの想いを無駄にしないためにも、さつさと脱出すんぞ」

木原は立ち上がり、冥土返しに向き直った。

一方通行には状況がつかめない。

「脱出？どオやって？」

「脱出経路の一つや二つ、用意してあるよ？」

当然だと言わんばかりに、冥土返しは言い放った。

そして、脱出経路を使って学園都市の外に脱出できた。

決して多いとは言えない、生存者たちとともに。

「ってわけだア」

彼は、どこから取り出したのか、コーヒーをすすりながら語り終えた。

「なんていうか…すごかったんだな」

垣根は目を丸くして言う。

「まア、そんなことはどオでもいいだろ。今生きていれば、それで打ち止めの幸せそんな寝顔を眺めながら、彼は優しく言った。

「…そうだな」

垣根も賛同する。

今、生きている。

そんな当たり前の事実を、こんなに嬉しく思ったことはなかった。

「ンじゃ、帰るぞオ」

そして彼らは歩き出す。

彼らの、帰るべき場所へ向かって。

「って、いつの間にてめエは我が家の一員になってやがんだア!？」

「今更かよ!？」

完

エピローグ（後書き）

これにて完結です。

読んで下さった方、こんな駄文にお付き合いいただき、ありがとうございます。
ございました。

感想などありましたら、ぜひお願いします。

みなさんも、大切な人、帰るべき場所を大切にしてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8745s/>

とある都市の緊急警告(バイオハザード)

2011年10月9日00時07分発行